

アディロンダックの一夜：『宗教的経験の諸相』背後の 2、3の物語

吉永進一¹

要旨：1898年7月、ウィリアム・ジェイムズは『宗教的経験の諸相』執筆において重要な事件となった「ワルブルギュスの夜」と呼ばれる神秘的な経験をしている。この経験について、ソール・ローゼンツワイクはフロイト的な解釈を行い、女子学生との秘めたる恋愛があったのではないかと推測している。その女子学生ポーリーン・ゴールドマークは、ヤコブ・ランクのメシア主義を信奉する家系の末裔であった。その教義は奇妙にも『宗教的経験の諸相』におけるジェイムズの主張に類似していた。

キーワード：ウィリアム・ジェイムズ、ポーリーン・ゴールドマーク、ヤコブ・ランク、
サバタイ主義

1. はじめに

リチャード・ローティは、「ジェイムズの『諸相』における、いくつかの不統一性」Some Inconsistencies in James' varietiesという論文において、ウィリアム・ジェイムズの著作『宗教的経験の諸相』（以下、『諸相』と略記）について以下のような評価を与えていく。

「よかれあしかれ、ジェイムズはプラグマティスト以上のものである。私の意見は、あしかれ、だと思う。というのも『根本的経験論』や『多元的宇宙』などに価値あるものをまったく見出せないからである。私の読みでは、それはベルグソン的形而上学の、非プラグマティックな練習である。……しかしながら、よろこんで譲歩したいが、これら二冊と異なり、『諸相』は今後何世紀も読む価値のあるものであろう。それは、なにか特定の結論にいたる、よい議論を行なっているからではなく、例外的なほどに度量の大きい人間の知的自伝の一部だからである」¹

ローティらしい、ジェイムズへの皮肉を含めた『諸相』評である。この批評に反して、『根本的経験論』『多元的宇宙』にこそジェイムズ思想の真骨頂はあると思う者は私のみではないだろう。しかし、その点を除けば、ローティの指摘は正しい。

『宗教経験の諸相』は、その出版直後から話題となり、20世紀初頭に出版された宗教学書の中では異例なほど長く広く読まれており、今後もロングセラーが続く可能性は高い。生の宗教資料を、その奇矯さも含めて収録したこと、しかもそれらの資料を頭から否定するのではなく、好意的、共感的に、しかし批評精神を失わずに論述している。扱われた資料類は、博物館の展示物のように、その奇矯さを誇示するのではなく、人生の事実として語られていく。

る点が、広く読者の支持を集めたのであろう。

さらに言えば、「特定の結論にいたる、よい議論」でないことも確かである。フロイトの『トーテムとタブー』、フレイザーの『金枝篇』など、今なお読まれる（ただし読者はかなり少ないが）過去の宗教学書は『諸相』以外にもあるが、それらの書物はいくつかのテーゼにまとめることが容易い。しかし、『諸相』はそうではない。ジェイムズは特定の結論を避けているかのように見える。最初に精神療法について賞賛しながらも、次の段階では精神療法や倫理の不十分さ、宗教独自の価値が賞賛され、さらに結末では宗教的救済が超自然的な存在ではなく人間の意識下の心に由来すると述べて、一見心理学的な還元説に立つかと思わせながらも、その人間の意識下の心がそれを超えた彼方につながっていると述べて、結局、還元論にはおさまらない。つまり、宗教経験なるものは必要なのか不要なのか、またそれは心から生じるのか心の外から来るのか。ジェイムズはいずれにも賛意を表しているようである。『諸相』に限らないが、ジェイムズの思考と文章は、つねに意識野の余白を組み込もうとしているために、視野自体が流動する。こちらが足がかりを作っている間に、叙述は一步先をいっているように見えるのである。批判を用意するころにはジェイムズはそこにはおらず、逆にジェイムズと共に進んでいると、彼が到達していないにもかかわらず、彼の見ている先と一緒に遠望してしまうような気にかられる。

ともかく、この思索の流動性を支える強靭な好奇心（あるいはローティの言葉を借りれば「例外的なほどに度量の大きい」）は、単なる蒐集家のそれではなく、他者を自己の実存の問題として理解しようとする力でもある。ジェイムズ哲学の特徴は、哲学のための哲学ではなく、彼自身のためのものであるという点にある。若き日の憂鬱体験とルヌーヴィエ哲

1 舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 教授

学によるその克服が彼の思索の出発点であるとはよく言われる。自由意志の力を信じることが自由意志の存在をもたらすという経験が、精神療法（mind cure）への信頼や積極的思考への評価にもつながっている。『プラグマティズム』と『信じる意志』に見られるような、積極的な意志的努力をよしとして、社会が改善されていく可能性を信じる前期のジェイムズ思想である。しかし、憂鬱と無力感は克服されたわけではなく、ある時期から彼につきまとい、晩年の彼を悩ますことになる。意志的努力によってどうしようもない事実（最終的には死を意味する）と、どう折り合いをつけるかという問題が晩年のジェイムズ思想の背後にある。そして、『諸相』は、健康を失って病に悩みはじめたジェイムズが最初に執筆した著作になる。「健全な精神」と「病める魂」という章が『諸相』に含まれる背景には、そうした彼の伝記的な事実が関係している。

本論文の目的は、以上の見通しにたって、哲学的な議論ではなく、『諸相』執筆の背後にあったジェイムズの歴史的な事実を掘り起こすことにある。

最初にジェイムズの根本的な問題意識を、彼の家系から論じたフェインシュタインの研究を紹介し、そのあと『諸相』執筆に決定的な事件となった1898年7月8日から9日にかけての夜の出来事について論じてみたい。それは思想の分析にはなっていないが、思想の余白という価値はあるかと思う。

2. ジェイムズ家

1980年代、伝記と思想を結びつけた重要な研究書が2冊出ている。ジラルド・マイヤーズの『ウィリアム・ジェイムズ』²とフェインシュタインの『ウィリアム・ジェイムズになる』³である。前者は『心理学原理』を丹念に読み込み、後者はウィリアムとジェイムズ家の葛藤を描き、伝記的研究を飛躍的に進歩させた。ここでは特に後者によって、ジェイムズの憂鬱体験の背景を描いてみたい。

ジェイムズ家は元来、スコットランド長老派の出身で、北アイルランドに移り住み、そこからさらに飢饉とカソリックに追われて、ジェイムズの祖父の代でアメリカに移住してきた。祖父はオルバニーのウィリアムと呼ばれているが、1789年に18歳でアメリカに移民、最初は丁稚から身を起こし、着々と富を築いて1832年に死去した際は300万ドルの財産を残し、ニューヨーク州で二番目の金持ちになっていたという。この厳格なカルヴァン主義者で勤勉な成功者は、シラキュースで製塩業と不動産業を営み、エリー運河掘削に際しては積極的な推進者の一人であり、イリノイ州だけで4万エーカーもの土地を所有していた。しかし結婚生活には恵まれず、最初の妻エリザベスは双子の男の子を産んで死去、二番目

の妻メアリーは娘を出産して間もなく死去、三番目の妻キャサリンは逆に十人の子供を産んだ。双子の男の子の内、ロバートは父の共同経営者になったが若くして死亡、もう一人のウィリアムは長老派の牧師を目指すが中途で病に倒れ、牧師になるやスコットランドに留学、帰国後も父親の屋敷には戻らずに暮らし、遺産を相続した後は牧師も止めてしまった。ウィリアム・ジェイムズの父ヘンリー・ジェイムズ・シニアは、キャサリンの二番目の子供として1811年に生まれる。13歳の時、熱気球で遊んでいてひどい火傷を負い、片足を切断されたことから非行に走り、痛み止めを口実にジンを飲み始めたために、17歳でユニオン・カレッジに入学したときは完全なアル中だった。カレッジの学長は父の友人であり問題児の扱いに定評があった教育者だったらしいが、ヘンリーの方は家の金を使い込むし、学校を抜け出しボストンへと家出してしまった。1832年に父ウィリアムは亡くなるが、それで厳格な父から解放されたわけではない。遺言には、職業に就くための学費と最低限の生活費は保障する代わりに、勤勉で社会にとって有為な者にならなければ、その子供は遺産の分け前に預からないと書かれていた。この遺言の執行を巡ってはヘンリーだけでなくヘンリーの母からも異議が出され、法廷闘争が延々と続いた。一方、ヘンリーは実学より神学に興味を抱き、1835年にプリンストン神学校に入学しているが、既存の神学では満たされなかつたようで、裁判で一部勝訴し37年に遺産の一部を得ると神学校を退学している。以後、遺言に反し死ぬまで正業に就かず、国の内外を旅行し、当時最高の知識人たちと会話を交わし、数少ない読者相手に講演と執筆に精を出すことになる。ヘンリーは、無為の徒である悩みをエマソンに次のように書き送っている。「アメリカで三一歳を迎、実用的な学問にはまったく無知、しかも倦まず弛まず瞑想を続けるという悪い習慣をもち、全人類に対する衝動的愛情の力を感じている・・・私は何をしたらいいのか」。

裁判の結果、1842年までに遺言は基本的に破棄され、ヘンリーは父の遺産を相続することに成功する。43年から2年ほどヨーロッパ旅行に出るが、その頃、精神的な危機を経験し、1844年春、イギリスのワインザーで一種の意味不明の突然の恐慌状態に襲われている。「五月の末のある日、夕食後、家族が消えてしまつた食卓に一人残つて、私はぼんやりと暖炉の残り火を見ていた・・・すると突然、『恐怖が私を襲い、骨まで震えた』。どう見ても、それは異常で悲惨な恐怖だった。・・・それは十秒も続かなかつたが、私は我が身が滅んだように感じた」⁴。この時期、彼はカルヴァン主義からスウェーデンボルグ主義に改宗することで危機を乗り切る。なお、1843年、ヘン

リー・シニアは、イギリスでスウェーデンボルグの翻訳者ジェイムズ・ジョン・ガース・ウィルキンソンに出会う（三男の名前は、このイギリス人医師から貰ったのである）。そして常々医業に疑問を感じていたJ・ウィルキンソンは、ヘンリーからホメオパシーの存在を教えてもらい、ホメオパシー医として成功を収める⁵。この非正統医療への関心は、ウィリアムにも受け継がれることになる。さらにヘンリー・シニアはフーリエ主義にも熱中し、神秘主義的キリスト教と社会主義を組み合わせた社会思想を伝道することが、彼の「仕事」となった。とはいえ、講演をしても聴衆は集まらず、出版物が世に認められることもなかった。

彼のもう一つの希望は家族だった。資本とカルヴァン主義と権威主義的な父に支配された家に代わる、自由で理想主義的な新しい家、それが彼の最高の作品となるはずだった。ヘンリー・シニアは、子供たちをある時は家庭教師や私塾に預け、ある時はヨーロッパの学校へ行かせて、正規の教育を受けさせなかつた。食卓では様々な話題を出しては子供たちに議論させた。ヘンリーの友人エマソンは1860年頃、夕食に招待されて、子供たち同士が掴みかからんばかりの勢いで議論しているのに当惑している。

結果として、上の二人はアメリカ最高の哲学者と小説家として名誉をほしいままにしたが、下の弟妹は不幸な人生を送っている。ガース・ウィルキンソン（ウィルキー）とロバートソン（ボブ）は、南北戦争に志願して出兵し、除隊後はフロリダで農園の経営に乗り出したが、結局惨めな失敗に終わる。ウィルキーは、その後ミルウォーキーに流れ、いくつかの事業に投資しては失敗を繰り返している。1881年には8万ドルの借金を抱えて破産を宣告され、心臓と腎臓を病み、1883年に同地で亡くなっている。ボブは、その後西部に流れ、定職に就けず最後にはアル中になって精神病院に入るなどして、死ぬまで長兄ウィリアムの悩みの種であった。そして末娘のアリスは、南北戦争による結婚適齢期の男子人口の減少もあって一生結婚できず、病に悩まされ寝たり起きたりの生活を送る。アリス・ジェイムズの日記がフェミニズム文学の関係で再評価を受けるのは近年になってのことである。

ウィリアムに話を戻せば、若い頃の父親と同じく彼もキャリアで悩んだ。最初は画家を志望しながら父親の反対で潰され、次に父親の強い勧めもあって自然科学、生物学を学ぶが、根気強い実験観察は彼の性に合わずに挫折する。そして職業を身につけるために医学を学ぶが、解剖と臨床を嫌っていた。父親のように無為徒食の生活は送りたくないという気持ちも強かったが、大嫌いな医業でなければ、何を天職とするべきかという問題があった。医学部を終

了した年、すでに27歳になっていた。この焦燥感も相俟って、この1869年の秋から体調を崩し、その後しばらく極度の憂鬱症に悩まされている。『諸相』の次の文は引用符で括られているものの、ジェイムズ本人の経験と言われている。「私の心に、精神病院で見た癲癇患者の顔が浮かんで来た。黒い髪の若者で、青白い肌をして、完全に呆けた状態で、一日中ベンチに腰掛けるか、膝を抱えて壁にもたれ掛かっていた。・・・私にも潜在的にあらざる可能性がある、そう感じた。時期が来たので彼が発病したように、時期が来て私が発病したとしても、運命に抗うすべはない・・・全身が総毛立つた。この恐怖の後、宇宙は一変した。毎朝起きるたびに鳩尾に不安な恐れを感じ、それ以前も以後も感じたことのないような生の不安を感じた」⁶。

この憂鬱体験は、彼個人の問題だけではないことを彼は意識していた。それは同ページの脚注で、「同じく突然の恐怖に襲われた例」として父ヘンリーの著作を挙げていることからもわかる。

当時、精神病は遺伝で決定されるという説が強かった。例えば、進化はプラス方向だけでなくマイナス方向の獲得形質も遺伝すると主張した、フランスの精神科医ベネディクト・モレルの退化説は、英仏だけでなくアメリカの精神医学界も席巻していた。

「精神的退化は遺伝するものであり、退化者の特徴が代々遺伝してゆくにつれて、家系は次第に衰退していくついには絶えてしまうにちがいないとモレルは考えていた」⁷。精神科医ジェイムズは、これを自分の家系に引きつけて、自分の心の中の时限爆弾を恐れていた。父親の体験は精神病理からすれば、憂鬱症の発作に過ぎない。伯父ウィリアムの娘キャサリンは1860年に精神病院に入院している（彼女は主治医だったプリンス博士と結婚するが、1883年にプリンス博士が自殺するという悲劇的な結末を迎える）。ルヌーヴィエの自由意志の説を読み、「自由意志の存在を信じる」という自由意志行使することで、この憂鬱体験を抜け出せた、というのはこの時期の話である。

このヘンリー・シニアとウィリアムの憂鬱体験を重ねてみると、いずれも決定説への反逆と人間中心主義への移行という点で共通している。神は絶対的、超越的な存在であり、人間の救済も地獄行きもすでに決定されているカルヴィニズムに対して、ヘンリー・シニアは、超越的な存在が人間に近く、神や天使と人間が交流できるスウェーデンボルグと、人間の活動によって世界が極楽と化す空想的なフーリエ主義とを選択した。ウィリアムは天上界が地上界を決定するというスウェーデンボルグの相應説を嫌い、超越的な世界が存在しない科学的世界に移る。しかし、そこでも医学的な決定論が彼を待っていたわけ

である。つまり憂鬱体験は、父子二代に渡る決定論との戦いと見ることもできる。そして、ウィリアムの宗教と科学を超えた立場を構築するための格闘は、『諸相』にも続いていると見ていいだろう。

しかし、格闘は格闘であって、実際のところは、憂鬱症が完全に消えたわけではない。後で触れるビヨルクの研究によれば、快活明朗なハーバード大教授という表の顔の裏で、妻宛の手紙で落ち込んだことや、病気の愚痴を書き続けている。ジェイムズの生涯は旅行と講演という活動で大半が占められているが、活動的な生活を送ったのは、身体を動かすことによって憂鬱が致命的なものになることを避けたのではないか。そうであればこそ、『諸相』が身体の移動や運動が停止したところで書き始められた、という点には重要な意味がある。

3. 『諸相』執筆

『諸相』は1901年と1902年の二度に渡るエジンバラ大学での、自然神学についてのギフォード講座での講演録である。ジェイムズが同講座から依頼を受けたのは1896年のことである。この年、ジェイムズは異常心理に関する「幻の」ローウェル講座を行っている。幻というのは、活字化を計画しながらも結局出版されず、原稿も残っていないからである。ユージン・ティラーの研究によれば、講演は「夢と催眠」「自動現象」「ヒステリー」「多重人格」「悪魔憑き」「魔女」「退行」「天才」の八講から成り、異常心理研究から心霊研究までを網羅していたという。内容と時期からして、この講演は『諸相』の先駆をなしていたと想像される。

ギフォード講座への出講が正式に決定したのは、1898年である。当初は1900年の予定であったが、以下のようなジェイムズの体調のせいで一年遅れの1901年に行われた。さて、1898年7月8日のこと、ジェイムズは恒例の夏の山登りに出掛ける。朝7時に出発し、5時間かけてアディロンダック山地の最高峰マーシ山（標高1,629m）に到達、4時に山頂を出発し1時間でパンサー・ロッジ・キャンプという山小屋に到着し、そこで大学生らと落ち合う。彼は前夜3時から寝てなかつたが、目は冴えていた。この夜、彼は山小屋をさまよいにて、後述するような一種の神秘的な経験を得る。この経験が『諸相』執筆の原動力となつたと、妻への手紙では書いている。

しかし、この登山の経験は、プラスのものだけではなく、マイナスの影響もある。

この夜以来、彼は心臓病に悩むようになる。それでも翌1899年も彼は、前年の神秘的経験を求めたのか、また渓谷を訪れマーシ山に登っている。ただし今回は、道に迷ひひたすら疲労を重ねるという惨状で、57歳の心臓は決定的に悪化した。こうして「1899

年7月から彼独特の病弱状態に陥った。つまり欲求不満だけを感じる時期である。しかしその間も、細切れの時間と断続的な精力をなんとかやりくりして、学問と著作に励んだ」と言われる⁸。『諸相』の原稿のかなりの部分は、一日数時間ベッドの中で書かれたのである。

1899年8月、ドイツのナウハイムに温泉治療のために赴くが、これから2年間アメリカを離れて、旅から旅への療養生活が始まる。以下、ダニエル・ビヨルクの研究書『ウィリアム・ジェイムズ』によつて、順を追つてみよう⁹。ナウハイムでは同地の心臓医療の権威テオドール・ショットの治療が功を奏したか、症状が軽くなつたのでロンドンに戻り弟ヘンリーを訪問、その後12月、転地療養のためスイス経由でローマへ向かう。4月にローマを発ち、5月にジュネーヴでヴィードメルという医者の診断を受け電気治療を受ける。その間も、ギフォード講演の原稿をまとめることに「奇妙なくらい興奮を覚え疲労を」感じていた。その後、再びナウハイムに戻るが容態ははかばかしくない。「本当のところ、自分にはまったく体力が残っていない。昨日は一日中恐ろしいほどの脱力感に苛まれていた」（1900年8月25日付）といった妻宛の手紙が残されている。

ジェイムズは、この時期に、ローマ在住のアメリカ人医師ウィリアム・ボールド温博士の新治療を試している。彼はすでに1892年にフローレンスでボールド温と出会い、ハーバードの衛生学教授に推薦するほど彼を高く評価していたのだが、その療法は山羊のリンパ腺、脳髄、睾丸の混合液を注射するという若返り療法だった。ジェイムズ自身、1894年にこの治療法を自分の体で実験し、注射針の消毒が完全でなかったために腫れをおこし5週間も寝込むという結果に終わっている。しかし、ボールド温療法への信仰は消えない。

1900年11月ローマに行き、ボールド温の治療を受ける。ホテルに滞在し、日に2回注射を受け、午睡をとり、夕方にはショットの処方した体操をする、その間にはギフォード講演の執筆を熱心に続けていた。心臓は良くなつたように感じたが、神経の方はますます悪化していた。そこでさらにもう一つの治療を行う。電池を借りてきて自分で電気治療を試みる。

歴史学者ビヨルクは、そのジェイムズ伝中で、以下のように書いている。

「そこにいたのは五八歳のウィリアム・ジェイムズだった。ローマのホテルに滞在し、最近心臓の勉強を始めたばかりの医師からヤギの抽出物の注射を毎日受け、はっきり心臓衰弱と診断されたわけでもないのに心臓の力をつけるためにショットの「体操」をしている、そして過労気味の神経に借りてきた電

池でショックを与える」¹⁰。電気療法、ボールドワイン療法など、ジェイムズはこうした異端的な療法を好んだ。『諸相』中でもマインド・キュア（後のニューソート）と呼ばれる、催眠術から派生した宗教的精神療法を好意的に評価している。また、宗教的心理カウンセリングの先駆となったエマニュエル運動を強く支持し、フロイトから非難されて落胆することは後述したい。

ジェイムズは、さらに友人にもボールドワインの療法を推薦している。友人の心霊研究家、フレデリック・マイヤーズがその一人である。1898年3月に流感から肺炎を患って以来めっきり体が弱っていた彼をローマに誘い、ボールドワインの治療を受けるように薦めたのはジェイムズである。マイヤーズは1901年1月にローマにやって来て、3日に最初の注射を受けた。最初は順調だったが、8日になって容態は急変した。肺炎がぶり返し呼吸不全に苦しめられるようになり、ついに同月17日帰らぬ人となった。ジェイムズは、ボールドワインの注射にはまったく責任が無いかのように、友人でケンブリッジ大教授で倫理学者、心霊研究家でもあったヘンリー・シジウイック宛の1901年1月20日付手紙で次のように書いている。「医学的見地からすると彼の症状は奇妙なものだったようと思われます。ここ一月間就眠時には必ず呼吸不全に苦しんでいましたが、心臓や動脈には何も問題はなく、神経的なものでした」¹¹。

それまで、有名なルヌーヴィエの自由意志論への転向、さらに『信じる意志』から『諸相』の「健全な精神」に至る、積極的な思考は心身の健康をもたらすはずだという信仰はジェイムズ思想の一方の基盤をなしていた。その片鱗は、マイヤーズの死因についての彼の診断にもうかがえるが、しかし、『諸相』執筆中、このような病と不安につきまとわれていたことは、存在の弱さを直視させ、『諸相』に複雑な陰影を与えたのではないかと思われる。とりわけ「病める魂」での「宗教」分析の深まりは、このような体験に基づいたものであろう。つまり、高揚した体験と、その後の鬱体験の両輪が相まって『諸相』の基調となっているわけで、いずれにせよ、これは重要な経験であった。そして、そこに至る出発点は、アディロンダックの一夜にあったわけである。そう考えれば、マイナスというだけでなく、豊かなものを彼にもたらしたとも言える。

4. ワルプルギュスの夜

さて、アディロンダックがもたらした身体への影響を先に紹介したが、さきに述べたように、もう一方で、高揚した経験も彼に与えている。山小屋をさまよいでて、一種の神秘的な経験を得ているが、それについて、翌日山荘に帰りつくや早速妻アリスに

次のような手紙を送っている。文中、エジンバラ講演とは、『宗教的経験の諸相』の元となったギフォード講演のことである。

「山小屋の内も外も、気温は申し分なし、月が上り、真夜中前には景色を照らしていた。大きな星がわずかに見えるだけだった。絶対に書いておかねばならない類の、靈的な目覚め状態に入った。自然の影響力、とりわけ良きポーリーンのような、私のまわりの者たちの健全さ、お前と子供たちの思い、波の上のハリー、エジンバラ講演の問題、そういうものが私の中で醸酵し、ワルプルギュスの夜となつた。私はかなり長い間森の中にいた。月の光はすべてのものを照らし、手品のように縞模様を作っていた。すべての自然神話の神々が、内的生活の倫理的神々と、私の胸の中で言いようのない会合を行っているかのようだ。二つの種類の神々は何の共通点もない。これでエジンバラ講演に向けてぐっと前進した。全情景のある種の重要性、もし何かその意義を言うことができるとしてだが・・・その永遠に続く新しさと、記憶のかなたから続く古さと衰退・・・このために来る価値はある。それも毎年。繰り返すとしても、本質的にはまったく無計画で予期されないものでないといけないと私は思う。そして、そういうものを手に入れることができるとしての話ではあるが、毎年来る価値はあると思う」¹²

ジェイムズは、自分の意識状態を観察し報告する達人であった。ここでも、いくつもの心の中の思いが、一枚のパノラマ画に縮尺されて描き出されている。原文は夢見心地的な文体と分析的な文章の交錯した魅力的な文章である。何か、奇跡的な僥倖が起こったという感じ、しかしそれは何であるのか言い表しようもない。その合間に生じる切迫感。これは『諸相』中、神秘経験を論じた有名な個所につながる。妻アリス宛の手紙で、「エジンバラでの講演は、この経験に溯ることができるだろう」とも述べているが、おそらく、この高揚した経験から神秘経験への洞察を得たと想像できよう。

ただし注意したいことは、この場所はジェイムズにとって、初めての場所ではなく、いくつもの思い出を重ねた土地であった。山登りを趣味としたジェイムズが、キーン渓谷を最初に訪れたのは1875年夏、保養地として有名だったアディロンダック山地をハーバード大の医学部生仲間とハイキングしていた時のことである。同地は観光地化が進みつつあったが、この場所はまだ俗化していない場所であった。ここを気に入った彼らは、お金を出しあって一軒の山荘を買い、これを仲間の名前をとってパトナム・キャンプと称した¹³。

一方、妻となるアリス・ハウ・ギベンズとも知りあつたのも、これと同時期である。紹介してくれた

のはトマス・ディヴィッドソンという思想家で、スコットランドに生まれ、英米各地を転々とした“放浪学者”であった。ジェイムズとは対立する観念論者の陣営に属す思想家だったが、二人は親交を深め、彼に大きな知的刺激を与え続けた。当時ボストンに寄留していた彼は、ジェイムズの父ヘンリーなど当地の先進的な（とはいえるもはや若くはない）知識人たちのクラブ「急進クラブ」に出入りし、そこで見かけたアリスを気に入つて紹介に及んだ。このデイヴィッドソンも、後にキン渓谷に「グレンモア」という哲学のサマースクールを開校している。ボストンの進歩的な知識人たちに好まれた土地であったらしい。そして1878年7月、新婚のジェイムズ夫妻は、ハネムーンをこの地で過ごしているのである。翌年5月にはハネムーン・ペイビー、長子ヘンリー三世が誕生している。1881年の夏もキン渓谷で過ごし、翌年には第二子ウィリアムが生まれている¹⁴。

この夜の事件の起った場所は、何度となく訪れてきた場所である。そうであれば、この経験は、日常から逃れ原初の自然に触れるといったものではなく、むしろ、いつも馴染んでいた自然が、突然その姿を変えたということになる。それでは、その変容は、ジェイムズの描いているように、突然、何の前触れもなく、自然の与える啓示のごとく起こったのかどうかということになる。つまり、彼の書き残した文章の余白になにがあるか、ということであるが、それは後述したい。

ここで、再びその夜の記述に戻ってみよう。彼の言う「靈的な目覚め」(spiritual alert) とは何なのか。自然神と倫理神の闘争や魔女の宴がどう関係するのか。ローウェル講演で発表した内容のひとつに「魔女」があったのを思い起させば、彼の表現も唐突といふわけではないが、ジェイムズの意図がどこにあるのか、やはりわかりにくい。

「良きポーリーン」として名前が出てくる女子大生が、ここで鍵となる。ビヨルクの研究では、息子ヘンリー三世の文章を典拠として次のように書いてある。ジェイムズの心臓を最初に悪化させる原因となったのは、この「ワルブルギュスの夜」の強行軍のせいだが、もし女子学生たちがいなければジェイムズはガイドに荷物を持たせて楽に登山できたはずであった。そういう理由で、妻アリスは同行した女子学生たち、特にジェイムズのお気に入りであったポーリーンに冷たかったという。

ポーリーンとジェイムズが知り合ったのは 1895年のことで、バトナム・キャンプで夏を過ごしていたジェイムズのところへ、弟子のディキンソン・ミラーが連れてきたのがポーリーンであった。彼女は 21 歳でプリンマー・カレッジ（アメリカの名門女子大）の最上級生である。一方ジェイムズは 53 歳だっ

た。彼女の印象をジェイムズはこう書いている。「幸せ、幸せ、幸せ、この場所の絶妙の美しさよ、それも私の良く知っている場所なのに。自然は恋をするために作ったんだろう、過ぎ去ったハネムーンのような。ゴーラードマーク嬢なる子は、真面目な完璧な小さな薔薇のつぼみで・・・猿のように断崖をよじ登るんだ・・・」。なお、この手紙は、妻アリス宛である。アリスがポーリーンに冷淡になった理由と、ジェイムズの開けっぴろげな性格がわかるだろう。

ポーリーンとの文通は 1897 年から死の三ヶ月前（1910 年 5 月）まで続き、時にその調子は非常に親密なものになっている。

1908 年 7 月、イギリスの湖水地帯にいたジェイムズが彼女に送った手紙の出だしはこうである。「最愛のポーリーン、三時間前にここに着いた時、きみの手紙が待っていてくれた。ちょうど、私との文通はきみにとって価値があるというより、厄介なものになってるんじゃないかという、不健全な確信がまた生じてきたところだったので。邪推を許したまえ！」この時彼は、四日間続けて手紙を書いている。「これが四通目の手紙で、きみのほうはこんな迫害を受けてしまごみしているかもしれないが、私の方は一瞬でも若がえった気分だ。三四歳、いや三四歳と半年は越えないね。これだけ書いていいんだから」¹⁵。ジェイムズは六六歳、ポーリーン嬢はもちろん三四歳だった。

この手紙は同年五月四日から二十六日にかけてオックスフォードのマンチェスター・カレッジでのヒッパート講演（『多元的宇宙』）という大仕事を終えた後、イギリスの各地を旅行した際に書かれたもの。リラックスした雰囲気はそのせいであろう。確かに、この文面の甘えたような雰囲気は、ただの文通相手とは思えない。

さて、このポーリーンについては、意外な文脈からの研究がある。

1992 年に出版された『フロイト、ユング、そしてキングメーカーのホール』と題する研究書である¹⁶。著者ソール・ローゼンツワイクは、ワシントン大学心理・精神分析学科名誉教授で、40 年近くをかけた労作である。1909 年、心理学界の重鎮 G・スタンリー・ホールが学長を務めるクラーク大学では、開学二〇周年式典としてフロイトとユングを招聘し、記念講演を行った。ジェイムズも聴講したこの講演は、アメリカに精神分析が根づく契機となる歴史的事件となったわけだが、その詳細について事細かに検証したのが、この著書である。もちろん、ジェイムズの件はホールやフロイトとの関係で触れられているに過ぎないが、なかなか面白い記述が見られる。たとえばホールとジェイムズは心霊研究をめぐって激

しく対立していたこと、ジェイムズはこの頃エマニュエル運動を支援していたが、それもフロイトに批判されて快く思ってなかつたことなどである。

エマニュエル運動は、ボストンのエマニュエル教会の牧師エルウッド・ウスターが1906年に始めた、先駆的グループ心理療法。ウスターはヴァントとフェヒナーという当時のドイツの新心理学の二大権威より心理学を学んだという異色の牧師だった。この運動に対しては、ジェイムズの友人で、その後ボストンで最初の分析医となったジェイムズ・ジャクソン・パトナム（前出のパトナム・キャンプのパトナム）など、ボストン医学界が批判に回り、その結果、次第に衰微していった。

この中で、ローゼンツワイクは、フロイトの自伝中の小さな事件（ジェイムズがフロイトと雑談中に心臓発作を起こした事件）を取り上げ、その原因について推理小説さながらの大膽な仮説を提出している。

クラーク大学でのフロイトの講演は、性的欲望と神経症的夢の関係についてのものであった。ジェイムズはこの講演を聞いてコンプレックスを刺激され、さらにジェイムズの性的欲望に関連のある場所（パトナム・キャンプ）にフロイトが滞在する予定と聞いて、心臓発作を起こした。フロイト理論によれば、意識下にあるこのような関係を指摘されても、当人は否定するものとされる。その理論通り、ジェイムズはこの三ヶ月後に夢に関する論文を書き、その中でフロイト理論を否定する夢解釈を行った。そして、そのパトナム・キャンプに関する性的欲望とは、1898年の「ワルブルギュスの夜」にほかならないとローゼンツワイクは主張する。この山歩きは、ジェイムズがポーリーンと合法的に一夜を共にしたいのために計画的にしくみだのではないか。ジェイムズたちが泊った山小屋の大きさと一行の人数からして雑魚寝状態であったはずで、興奮しすぎたジェイムズは、頭を冷やしに外へ出た、というのがこの夜の真相ではなかつたかというのである。

この解釈は状況証拠を組み立てたものに過ぎない。しかし、もう一つの状況証拠を挙げるとすれば、ジェイムズの受けていた治療法である。電気治療は、当時は神経衰弱に特効ありとされていたが、同時に性的不能治療でもあった。ボールド温の動物抽出物注射も一種の回春療法であった。そうなると、ジェイムズはポーリーンを性的対象として考え、そのために回春療法を受けたという推測はなりたつ。また、ローゼンツワイクが推理したように、「倫理的神と自然神の会合」という手紙の一節にも暗示されている。

他方、妻アリスへの開けっぴろげな報告を見ても、女子大生との秘めた関係という気配はない。もちろ

ん、ジェイムズのポーリーンへの好意は否定しようもないが、それが男女関係を目的としたものであつたのかどうかは、ここでは断定を控えたい。ポーリーンは、その後、消費者連盟に参加、ラッセル・セイジ財團社会研究局の副局長を勤め、労働者の生活改善に尽力した。ひとつ言えることは、ジェイムズが憧れた「健全さ」と「社会改良への情熱と努力」といった理念を具現化していた女性であったとは言える。

ただし、このポーリーンには、ローゼンツワイクも触れていない、さらにもうひとつの物語がある。

5. サバタイ主義の物語

ユダヤ教学者ゲーチュム・ショーレムの論集『ユダヤ主義のメシア的思想』¹⁷の中に、「ニューヨークのサバタイ主義者の遺言」と題する小文がある。解説が4頁少々、遺言のテキストが5頁弱の短いものだが、珍しさという点では白眉の史料であろう。というのは、ショーレムが1938年に入手したこの遺言の主は、1881年にニューヨークで死去したサバタイ主義者だからである。

サバタイ主義とは、17世紀、欧州から中近東にかけてのユダヤ社会を席巻した「偽」メシア、サバタイ・ツェヴィの教えを指す。イサーク・ルーリアのカバリズムを元にした救世主運動であり、律法主義の間に隠れていたユダヤ社会の宗教的熱情に火をつけ、「第二神殿以降最初の靈的なユダヤ教セクト」（ショーレム）に発展した。運動は拡大し、危機感を抱いたトルコ皇帝は彼を逮捕させる。そして、命と引き換えにイスラムに改宗したのである。しかし、この致命的であるはずの醜聞も、運動にとっては致命的とはならなかった。異教への改宗は救済のための必要不可欠な段階と信奉者たちは位置づけて合理化する。そして、これがサバタイ主義の要となる。サバタイ=ツェヴィの死後、トルコでバルヒア・ルッソーという後継メシアが出現し、内面的な宗教心が、外的な宗教や律法より上であると唱えた。そして、東欧で運動をラジカルに進めていったのが、サバタイ・ツェヴィの生まれ変わりと自称したウクライナ生まれのメシア、ヤーコブ・フランクである。彼は欧州のサバタイ主義者から信仰とお金を集め、フランク主義を広めた。ユダヤ教主流派からは嫌悪され、弾圧を被ったにもかかわらずセクトは存続し、東欧では一九世紀始め頃まで存在していたが、フランクの後を継いだ娘のエヴァが一八一六年に死去すると運動は消滅した。以上が、サバタイ主義の一部始終である。つまり、ショーレムは、一世紀も前に消えていたはずの東ヨーロッパのユダヤ教思想に、現代のブルックリンで出会つたことになる。

ただし、厳密に言えば、ゴットリープの信奉して

いた偽メシアは、サバタイ・ツェビではなく、その後に登場したヤーコブ・フランク（1726-1791）である。以下、アーサー・マンデルの研究書¹⁸によって、その経歴を紹介しておきたい。彼は本名ヤコブ・レイボウイツツといい、父がサバタイ主義者であったために、各地を転々としていた。子供時代のヤコブは愚連隊を率いる不良少年であったらしい。その後、商売の傍らカバラを研究するが、あまり優秀ではなかった。トルコのサロニカにメシアが誕生するというカバラの師匠の教えを聞いて同地へ出掛けて行く。サロニカはデンマー（トルコ語で背教者、つまりサバタイ主義者のこと）の中心地でもあったので、その教義によって、ヤコブはサバタイの生まれ変わり、メシアであると自称し始めた。フランクという名前がついたのもここの地である（フランクとはヨーロッパ人という意味）。メシアとなったヤコブは、サバタイ主義者の地下ネットワークを通じて、各地のユダヤ人社会に信者を増やしていく。

マンデルの伝記を読むかぎり、キリスト教やイスラム教に無節操に改宗し、信者から絞り取った金で自分の回りに「宮廷」を設け、東洋の王侯風の衣装でウィーンの社交界にデビューして注目を集めなど、希代のオポチュニスト、無節操の極みともいるべき人物像が浮かんでくる。しかしその一方で、キリスト教国家とイスラム教国家に囲まれながら、しかも他のユダヤ人社会からユダヤ社会から排除されても、セクトを存続させた政治的手腕は認めなければならない。1757年にポーランドから追い払われた彼は、トルコに逃げ込むやイスラムに「改宗」、2年後にはトルコ皇帝のお墨付を得て、東ガリキアに信者たちのキャンプを設置し、共同体生活を開始する。ここにユダヤ人の自治区を作れば（もちろん自分を王にして、であるが）、ユダヤ人問題は一挙解決するとポーランド国王に持ちかけてもいる。さらに領土を得た時のために、団の自前の軍隊も創設していた。その結果信者の間からは、後にポーランド国軍で活躍し、中には将官の位に上る者さえ出た。自分の信者の集団改宗を切り札に、ポーランド国王と取り引きを行い、1759年に集団改宗を行うが、この時改宗した者は慣例によって爵位を得ている。これが名目的なものに過ぎなかつたこと、彼がユダヤ教を決して捨てなかつたことは、その後異端審問にかけられた事でも明らかだが、これも「私は頭が弱いので」と、のらくらな返事でごまかしている。

しかし、この破廉恥なメシアの従姉妹の息子モーゼズ・ドブルーシュカは、フランス革命に理想の実現を見て、ジャコバン党に参加し断頭台に消えていく。フランク主義者たちの中には、宗教に幻滅して無神論に走つたものもいる。そして、その信奉者の子孫たちは、のちに革命から社会改良まで、硬軟の

度合いはあれ、さまざまな社会運動に挺身している。

さて、ショーレムに渡った遺書を書いたのは、ボヘミア出身のユダヤ人ゴットリープ・ヴェイリ（1802-1881）という。19世紀初頭、同地のフランク主義のセクト生活を経験している。ドブルーシュカのように、1849年の革命の時期、運動に参加し、失敗してアメリカに亡命している。その娘、レジナ・ヴェイリは、オーストリアの市民革命に参加し、テロ活動の容疑で死刑宣告を受けてアメリカに逃れてきたジョゼフ・ゴールドマークと結婚する。

ジョゼフは、医師で化学者であった。ニューヨークで雷管と薬莢を製造して産を成し、南北戦争中は北軍を支援している。ヴェイリとの間には十人の子供が産まれ、娘ヘレンはフェリックス・アドラーと結婚している。アドラーはドイツ出身のユダヤ人でコロンビア大学政治社会倫理教授、倫理文化協会の創設者で児童労働の廃絶を唱えた。別の娘アリスは最高裁判事ルイス・ブランダイスと結婚した。ブランダイスはアメリカ生まれだが、両親はやはりボヘミア出身のユダヤ人。ユダヤ人で最初の最高裁判事に就任したこと、最低賃金や労働時間の制限などの法を擁護したこと、ブランダイス・ブリーフ（準備書面）で有名であり、彼の名を取ったブランダイス大学もある（A・マズローが心理学科長を勤めた大学である）。末娘のジョセフィンは消費者連盟の研究主任として、児童労働や婦人労働の実態を研究し、義兄の利用したブランダイス・ブリーフを準備した。そして、ジョセフィンの姉が、ジェイムズと関係のあったポーリーンであり、ショーレムに遺書を渡したのはジョセフィンとポーリーンであった。

ゴールドマーク家はリベラルなユダヤ人の典型であったが、彼らがこれほど社会運動に熱心だったのは、フランク主義に由来するラジカリズムの伝統があったわけである。

しかも、フランク主義は、政治的だけでなく、宗教的にも権威破壊的なものであった。ショーレムは『ユダヤ主義におけるメシア的思想』で、フランクの神学は、難解なカバリズムのジャーゴンを避け、分かりやすく詩的であったと高く評価している。その教えをかいづまんで言えば、宇宙は善神の創造物ではない。善神の創造した諸世界は存在するが隠されている、宇宙を創造した悪神たちは、女性的なもので、死の天使と世界の支配者たちと関係がある。それらは地上に人間として受肉しており、「善神」への道を閉ざしている。現在世界には3つの支配者がいる。「生命」「富」「死」である。その最後のものを「智慧」に置き換えなければならない。善神は「智慧」と関係があるものの、「世界は不善の法の虜になっている」ので、人間には明らかにされていない。この不善の法を破壊することが肝要とされる。「キリ

ストは知つての通り、世界を悪魔の手から救うためにやってきた。私は存在する法と習慣の手から世界を救うためにやってきた。善神が自らを表すために、これをすべて廃絶してしまうのが、私の任務である」(フランク)。すべての宗教と現実の制度を廃絶することが真の道なのである。あるいは、サバタイ・ツェヴィイがそうしたように、まずは深淵に落ちることが必要である。そのためには宗教と習慣を拒否するだけでなく、「奇妙な行為」も必要(恥知らずな状態など)であり、深淵に落ちたら次は「沈黙の重荷」を背負う、すると「聖なる知識」が生じる。

この「奇妙な行為」とは、儀礼的な乱交である。異端的宗教団体に性的な放縱の噂はつきものであり、デマである可能性も高い。しかしサバタイ主義者～フランク主義者の間に、こうした隠れた儀式があったのは間違いないようである。単に、人間の無原罪性が行動の自由を許すという消極的理由だけでなく、罪を経験することが救済に必要であるという積極的な意味付けもなされていた。反律法的諸祭儀は、「生命」と呼ぶもののメシア的自由を示すものであった。

具体的にどのようなものだったか、詳しい記述は見当たらないが、儀式の後、明かりを消して性的な乱交が行われたらしい。ボヘミアでは、ゴットリープの従姉妹ルイゼ・クラレンベルグが一七九九年に行ったのが最後であったという。サロニカのデンマー派では、その後も長らく続けられていたらしい。たとえば1942年の時点で、スミルナに移住してきた医師は、自分の祖父がサロニカで儀礼的夫婦交換に参加したと認めていたという。ショーレムは、その教義と実践がデンマー派たちに由来すると推測している。それらの儀式は「明かりを消すこと」と呼ばれていたが、その源は、古代の大地母神崇拜に由来する儀式で、小アジアではイスラムの中に隠れて「明かりを消す者」という小セクトがこれを続けていたという。デンマー派は、この古代的な宗教的遺産を利用して、夫婦交換の神聖な教義に合致するようにしたものではないかというのが、ショーレムの推測である。

ここで、もう一つの事実を付け加えると、一九世紀半ばのアメリカにも自由恋愛主義と呼ばれる反律法主義の運動があった(もちろん1960年代に出現したフリー・セックスなる代物と比べるとぐっと「道徳的」だったが、その衝撃度においては変わらない)。その源泉は、フランスの社会主義者シャルル・フーリエである。そして、フーリエ主義はスウェーデンボルグ主義と結びついで、靈的な社会思想として、十九世紀中葉のアメリカで隆盛を極めた。こうしたフーリエとスウェーデンボルグの流行の中で、1847年に「ファランジエの愛」というフーリエの自由恋愛主義のパンフレットを出版して物議を醸した人物

が、ウィリアム・ジェイムズの父、ヘンリー・ジェイムズ・シニアであった。ジェイムズ・シニアは、ジェイムズ家の厳格な長老派プロテスタントの信仰に反逆し、より人間中心的で、神と人間がより近い宗教的理想的主義へと走ったのである。

つまり、かたや元アイルランドのプロテスタントの家系に属するジェイムズと、かたや東欧のユダヤ人の家系に属するゴールドマークのいずれもが、重苦しい伝統に反逆し、宗教的に性的自由を求める祖先を持つという共通点があったわけである。それがアディロンダックの一夜と関係あったのかどうかといえば、おそらくは偶然にすぎないだろうが、奇妙な偶然の一一致であった。

ショーレムの紹介しているゴットリープ・ヴェイリの遺言書に戻ると、そこにはヤーコブ・フランクの教えが色濃く反映されていた。律法主義を批判してこう言う。お前達の先祖は、タルムードの干からびた教えに満足できなかった、道徳、形而上学、宗教を論じたタルムードの部分は無視されていた。そこでカバラに向いた。そのために異端とされた。しかし、もっとも狂信的な反対者でさえ、この信者たちの知性の高さと道徳的高潔は、認めざるをえなかつた。「彼らは喜んでタルムードの完璧な知識を捨てた。というのも宗教の精髓を探し求めていた」からである。

人間と神については、こう述べている。「その者は、神の似姿で傑作であるので、創造主の手から離れたばかりの時の完璧な状態に再び戻る。その者は、肉体、こころ、魂のすべての病を免れ、墮落以前の無垢の状態に戻り、悪徳と罪を免れるだろう」「神は存在し、人は神の似姿である。この似姿である人は、壊れたり腐ったりしないものなのだ・・・私は知覚するだろう、創造主は人間を不幸に死なすだけの目的で、人にこころと魂を与えたのではないということ。そう、下等な動物よりも不幸に」。

『諸相』を書いていたジェイムズが、ポーリーンを介してフランク主義を知っていたかどうかといえば、それはわからない。ただ、『諸相』と、この遺書からは共通する音調が聞こえてくることは興味深い事実である。

ジェイムズの憂鬱がまったくの個人的な経験であると同時に、ジェイムズ家の歴史や19世紀の宗教や科学に文脈づけられた。それと同時に、我々の見えないところでジェイムズに影響を与えていたポーリーンについても、ローゼンツワイクの行ったようなフロイト的な解釈だけでなく、このように宗教史的に文脈をつけることは可能である。それらはジェイムズ思想の余白であり、無視してもかまわない領域ではある。しかし、そこに目を向けば、単純化を阻むが、しかしさらに豊かな歴史が見えてくるので

はないか。

6. おわりに

このエッセイの締めくくりに、マイヤーズの死とジェイムズについて触れておきたい。その場に居あわせたアレックス・ミュンスは次のように書いている。ジェイムズとマイヤーズは、どちらが先にあの世に行くことになっても、先に死んだ者が死の瞬間に残った方へメッセージを送るという取り決めを交わしていた。これはマイヤーズやガーニーが『生者の幻影』中で蒐集した現象であり、ジェイムズもそうした現象の可能性を信じていた。しかし死の当日、ジェイムズは悲しみの余りマイヤーズの病室に入る気力もなく、病室のドアのところに置いた椅子に座り、膝の上にノートを置いて来るべき瞬間を待っていた。以下は、その前後を記録した文章である¹⁹。

マイヤーズ「僕はもう長くないと分かっている。今日かい？明日かい？」

ミュンス「今日でしょう」

マ「嬉しいよ。覚悟はできている。怖くはない。ついに分かるんだ。ウィリアム・ジェイムズに伝えてくれ・・」

ミ「聞こえますか。苦しいですか？」

マ「いや。とても疲れているが、とても幸福だ」

それが彼の最後の言葉だった。

私が出て行くとき、ジェイムズは両手で顔を覆い、開いたノートを膝の上に載せ、椅子にもたれていた。ノートは白紙だった。

『諸相』の結末でジェイムズは、マイヤーズのサブリミナルセルフ説に依拠している。ジェイムズは、それ以前から心靈現象に興味を持ち、死後靈魂存続説とテレパシー説の間で悩んでいた。心理学では靈魂説を否定しながらも、しかし死後の世界については靈魂説の可能性を否定しきるところまでいかなかつた。しかし挨拶をせずに旅立ったマイヤーズとの死別は、靈魂説否定にさらにジェイムズを押しやるものであつただろう。もちろん、その後も靈媒との実験を繰り返し、心靈現象の存在を認めながらも、その説明仮説としてはテレパシー説と靈魂説の間で迷うことになる。死後存続についても、死後存続を認めながらも、人格を残したままの存続ではなく、人格を喪失して母なる海へ帰っていくというサブリミナルセルフ説を繰り返し語ることになる。

ジェイムズのサブリミナルセルフ説、あるいは母なる海(mother sea)仮説は、埒もない無益な語りのように見えるだろう。しかし、そこには、死という何も読みとれないように見える生の余白に、どうしても何か豊かなものを読み取ろうとした格闘を見るこ

とができるのではないか。

そう考えると、ジェイムズの人生の余白を読み取ろうというこの不十分な試みもまた、ジェイムズ的なものと言えるかもしれない。

追記 以上の文章は2000年頃に書いた「ジェイムズ夜話」という文章を基にしたものであり、2014年度大拙忌講演会（2014年7月3日、大谷大学）でも口頭発表させていただいたものと共通している。ただ、21世紀のユダヤ教研究やジェイムズ研究を参照しておらず、学術論文というには足りないが、もとより論文とは呼び難い内容であろう。走り書きの文章を丹念に読んで修正いただいた、同僚の荒川先生には深く感謝する。

¹ Wayne Proudfoot ed., *William James and a Science of Religions* (Columbia University Press, 2004) p.96.

² Gerald Myers, *William James : His Life and Thought* (Yale Univ. Press, 1896)

³ Howard M.Feinstein, *Becoming William James* (Cornell Univ.Pr., 1894)

⁴ Feinstein, op.cit., p.68.

⁵ Feinstein, op.cit., p.72.

⁶ William James, *The Varieties of Religious Experience* (Longman, 1902) p.161.

⁷ Eugene Taylor, *William James on Exceptional Mental States* (Scribners, 1983) p.132.

⁸ R.B.Perry, *The Thought and Character of William James* vol.1 (Little, Brown, 1935) p.255.

⁹ Daniel Bjork, *William James: The Center of His Vision* (Columbia University Press, 1988)

¹⁰ Daniel Bjork, op.cit., p.238.

¹¹ Alan Gauld, *Founders of Psychical Research* (Kegan Paul, 1968) pp.333,334.

¹² Daniel Bjork, op.cit., p.230.

¹³ Linda Simon, *Genuine Reality* (HarcourtBrace, 1998), p.156.

¹⁴ Linda Simon, op.cit. pp.172,173.

¹⁵ Josephine Clara Goldmark, "An Adirondack Friendship" in Linda Simon ed., *William James Remembered* (Univ. of Nebraska Press,1996) pp.188,189.

¹⁶ Saul Rosenzweig, *Freud, Jung, and Hall the King-Maker* (Rana House Press, 1992)

¹⁷ Gershom Scholem, *The Messianic Idea in Judaism* (Schocken,1971)

¹⁸ Arthur Mandel, *Militant Messiah: Or, the Flight from the Ghetto: The Story of Jacob Frank and the Frankist Movement* (Humanities Pr., 1979)

¹⁹ G.Myers, *William James*, p.613.

(2018.12.7受付)

A NIGHT IN ADIRONDACK: TWO OR THREE STORIES BEHIND THE VARIETIES OF RELIGIOUS EXPERIENCE

Shin'ichi YOSHINAGA

ABSTRACT: William James had a strange and mystical experience he called Walpurgisnacht in July, 1897. The night was important for writing *The Varieties of Religious Experience* in some ways. Saul Rosenzweig thinks there was a hidden love affair between him and a girl student behind the scene, giving a Freudian interpretation of it. The girl, Pauline Goldmark, was a descendant of the Jewish family who believed in Jakob Frank's messianism. Its doctrines are similar to what James claimed in his book.

Key Words : William James, Pauline Goldmark, Jakob Frank, Sabbataism

